鑑賞

今回、「言語文化」の「近代2」に収録された太宰治「待つ」は、ごく短い小説ながら先行研究も比較的多く、考える点の多い小説である。本稿では、この「待つ」をより深く味わうために必要な観点として、「待つ」が創作集「女性」（博文館　昭十七）に収録されるまでの経緯と、「十二月八日」と「待つ」の関係を、「女性」の目次を示した上でまとめてみたい。もちろん、小説を過度に作家に還元する必要はないが、「待つ」が収録されるまでの経緯は、戦時下、一人の作家が自らの小説を世に送り出すための、密やかな格闘のようにも見えるのだ。

昭和十七（一九四二）年六月に博文館より刊行された創作集「女性」には、女性を語り手とする一人称小説が九篇収録されている。それは収録順に次の通りである（カッコ内は初出を示す）。

「十二月八日」（「婦人公論」昭十七・二）
「女生徒」（「文学界」昭十四・四）
「葉桜と魔笛」（「若草」昭十四・六）
「きりぎりす」（「新潮」昭十五・十一）
「燈籠」（「若草」昭十二・十）
「誰も知らぬ」（「若草」昭十五・四）
「皮膚と心」（「文学界」昭十四・十一）
「恥」（「婦人画報」昭十七・一）
「待つ」（雑誌・新聞未掲載）

右の通り、「十二月八日」から「恥」まではいずれも雑誌に掲載された後、この創作集に収録されたが、「待つ」はどこにも発表されていない。「教材のねらい」の「1　選定の理由」にあるように、「待つ」は「京都帝国大学新聞」の依頼を受けて書かれたものであるが、このあたりの経緯は、太宰の妻である津島美知子氏が、「コント「待つ」の初出誌は長い間わからなかった。これが「創作年表」の「昭和十七年三月号、コント、京都帝国大学新聞六枚」に当たることを「ユリイカ」の故伊達得夫氏が教えてくださった。伊達氏は当時、同新聞の編集部にいて太宰に原稿を依頼し書いてもらったが、「待つ」の内容が時局にふさわしくないという理由で原稿を返したと、伊達氏から直接聞いた。」（「回想の太宰治　増補改訂版」人文書院　平九）と詳細に説明している。

こうした美知子氏の詳細な説明に加えて、近年刊行された伊達得夫の遺稿集（回想録）の中に「待つ」に関する記述があったことにより、「待つ」研究は新たな局面を迎えつつある。伊達は「京都帝国大学新聞」編集部に所属していた頃を、「一回生の冬、太平洋戦争がはじまった。その翌年の京大新聞春休み号に、ぼくたちは太宰治の小説をもらうことを決定した。（略）約束の日までに太宰治の原稿は送られてきた。それは「待つ」という短篇であった。出征した夫をきょうも待っている――という若妻の手記の形のものであった。それは学年末の新聞四面に挿画入りで掲載されたが、しかしその新聞はだれの手にも渡らなかった。発行と同時に検閲によって発禁を命ぜられたのだ。太宰の小説が反戦的だというのがその理由であった。（ぼくたちは今、太宰治全集第五巻によってその小説「待つ」を読むことができる。（略））」（「詩人たち　ユリイカ抄」平凡社　平十七）と回想している。

「待つ」を読んだ後に伊達の回想を読むと、伊達の言う「待つ」が全く別物であることに気づくだろうし、また一方で「ぼくたちは今、太宰治全集第五巻によってその小説「待つ」を読むことができる」という部分を見れば、伊達の語る「待つ」は、現在の「待つ」と同じものを指している、と考えられるだろう。この伊達による回想については、近年、田中良彦が、伊達が当時の「京都帝国大学新聞」で起きていた別の発禁事件と混同した可能性を示しつつも「「反戦的」との回想は貴重で」、「若妻の手記」という形についても「記憶違いであっても「待つ」を考える際、示唆的である」（「太宰治「待つ」覚書き」「キリスト教文学」平二十四・八）と指摘し、玉田琴乃も「伊達に記憶違いがなかったのなら、「待つ」の第一稿は創作集『女性』で発表されたものとは異なる物語であったと考えられる」（「太宰治「待つ」論―成立の背景から見えてくるもの―」「学習院大学国語国文学会誌」令二・三）と述べている。「待つ」には別の原稿があり、しかもその内容は出征した夫を待つ妻による手記であったという伊達の回想は、「待つ」研究の今後の可能性を拓くものになるかもしれず、また先の田中氏、玉田氏の指摘はいずれも、「京都帝国大学新聞」と「待つ」の新たな関係の可能性を指し示している。

ここで、今度は太宰が「待つ」を創作集「女性」に追加したいと出版社に願い出た時の書簡を見てみたい。太宰は「女性」を刊行する博文館出版部の石光葆へ、次の書簡を送っている。

ただいま、別便速達で「待つ」といふ新原稿、お送り致しました。五枚の短篇ですが、あの「恥」といふ作品の次に（つまり、「恥」と「あとがき」の間に。）入れて下さいまし。最後の、しめくくりに適した作品だと思ひますから、どうか、そのやうに、お願ひ致します。（昭和十七年二月二十日付、博文館出版部石光葆宛「太宰治全集」第十二巻　筑摩書房　平十一）

右の書簡の後、太宰は同（昭十七）年二月二十四日にも石光葆に宛てて目次の組み方を指示しているが、すでに校正段階に進んだ創作集を、再度編み直すほどの「最後の、しめくくりに適した」〈何か〉が「待つ」にはあったということになる。

この創作集の冒頭に置かれた「十二月八日」は、小説家の妻で「園子」の母でもある「私」が綴る日記形式で書かれた小説である。「私」は十二月八日の有様を、ラジオ放送で聞いたり新聞を読んだりしては緊張した面持ちをみせているが、「町の様子は、少しも変つてゐない」「店先の様子も、人の会話も、平生とあまり変つてゐない。この静寂が、頼もしいのだ」と、いつもと変わらぬ日常と地続きに開戦の日を綴っていく。しかし末尾近くで園子を背負って夜道を歩く際、「燈火管制なのだ。もうこれは、演習でないのだ。心の異様に引きしまるのを覚える。でも、これは少し暗すぎるのではあるまいか」と言い、その暗闇に女学校の時に「吹雪の中をスキイで突破した時のおそろしさ」を重ねていく。この日常を襲う得体の知れない「おそろしさ」は、「待つ」の「私」が語る「大戦争が始まって」以降の周囲の様子と響き合うだろう。その意味で、「十二月八日」から始まる日常を覆う暗闇の先に、希望を込めた「待つ」という行為を見出した小説「待つ」は、「最後の、しめくくり」にふさわしいと言えよう。

＊「十二月八日」の本文は、「太宰治全集」第六巻（筑摩書房　平十）による。その際、旧字体は新字体に改め、ルビは省略した。

＊「待つ」については、拙稿「太宰治「待つ」論―「京都帝国大学新聞」との関連を踏まえつつ」（「大妻国文」平十五・三）、石橋紀俊「太宰治『待つ』論―待つことの倫理について―」（「学大国文」平二十六・十）、齋藤樹里「太宰治「待つ」論―待つてゐる「私」の〈姿勢〉―」（「國學院大學大学院　文学研究科論集」（平三十一・三）、等もあわせて参照。